

チーフストラテジスト 瀧山裕二の Weekly Letter

第131回「米国FOMC(連邦公開市場委員会)と日銀金融政策決定会合について」

先月中旬、米国FOMCと日銀金融政策決定会合が開催されました。今週は、これらの会合についてお伝えします。

～2026年9月 米国FOMC～

9月15～16日に開催された米国FOMCでは、政策金利は0.25%引き上げられ3.75～4.00%となりました。2023年7月以来3年2か月ぶりの引き上げとなりました。ウォーシュFRB議長は、FOMC後の記者会見で今回の決定は、「経済が堅調に推移する一方、インフレ率は高すぎる状況が長期間続いていることから引き上げた。」と述べました。決定には投票権を持つ12人のFOMCメンバー全員が賛成しました。同時に発表された「FRBメンバー経済・政策金利の見通し」を見てみましょう。表1「FRBメンバーの経済・政策金利予測」をご覧ください。

この表は2026～2028年の年末時点の政策金利（中央値）、実質GDP成長率、失業率、コアPCE上昇率の見通し（メンバーの平均値、ウォーシュ議長の見通しは入らず）が掲載されています。カッコ内は前回6月発表の数字です。今回の見通しでは、2026年末のコアPCE上昇率（物価上昇率）が3.4%と前回より0.1%ポイント（Pt）上方修正されており、インフレ率（物価上昇率）が高止まりする見通しとなっています。一方、実質GDP成長率や失業率は2026年以降も堅調な状況が継続する見通しとなっており、FOMC参加者は物価の沈静化に重きを置くこととなりました。政策金利見通しを見ますと、今年の年末の見通しが4.1%と前回より0.3%Pt上方修正され、年内にもう一度の利上げを見通す参加者が多いことが分かります。年内のFOMCは10月下旬と12月上旬に開催されますが、11月初旬の中間選挙への影響を避けるため、12月上旬のFOMCで再度政策金利の引き上げが行われる可能性が高いと考えています。

～日銀金融政策決定会合～

一方、9月17～18日に開催された日銀金融政策決定会合では、政策金利を0.25%引き上げ1.25%とすることが決定されました。ベッセント米財務長官から利上げが強く求められていたこともあり、引き上げは概ね想定されていました。植田日銀総裁は、政策決定会合後の記者会見で、「世界的なAI関連需要の増加や政府の各種施策が日本経済を下支え、景気は緩やかに回復している。物価面では原油高を起点とする物価上昇圧力が今後も幅広い品目の価格上昇に波及していく可能性が高い。そのため物価の安定目標とする2%を超えていくリスクが顕在化し経済に悪影響を及ぼさないため、物価上昇率を2%程度に安定させる局面に変化したと考えている。」と述べました。この「局面変化」という言葉には、景気回復は概ね見通せた一方、経済に悪影響となる物価上昇に目を配る時期に来ているとの考えが示されていると思います。前回6月の政策金利決定会合までは、半年以上の期間をかけて利上げを行ってきましたが、今回は利上げの間隔を3か月間に短縮しました。金融市場では年内にあと1回の利上げを想定する市場関係者が多くなっています。

～日・米政策金利引き上げの影響について～

米国の政策金利引き上げは、中央銀行としての独立性を印象付け、市場関係者の信頼感を醸成した点で効果があったと考えます。ただ、11月の中間選挙を控え、金融市場は与党（共和党）と野党（民主党）の経済や外交に関する論戦で乱高下しやすい状況は継続するのではないかと思います。

一方、日本の政策金利引き上げについては、景気情勢に加え国際情勢や為替動向なども見据えた上での引き上げであったと考えます。政策金利1.25%の水準は、およそ31年ぶりの水準であり、また10年国債金利3%超えの水準はおよそ30年ぶりの水準となっており、国内事業者にとって負担感が大きくなっていると思います。

（グラフ1をご覧ください。）そのため、今後の政策金利決定に際しては、物価上昇圧力に加え国内景気的情勢、特に中小事業者の業況などを勘案する必要があると考えます。これからも、政策金利の景気に与える影響を注視していく所存です。

表1

FRBメンバーの経済・政策金利予測【2026年9月】

カッコ内は前回見通し、(単位:%)

	2026年	2027年	2028年	長期
政策金利	4.1 (3.8)	4.1 (3.6)	3.9 (3.4)	3.2 (3.1)
実質GDP成長率	2.3 (2.2)	2.4 (2.3)	2.2 (2.2)	2.0 (2.0)
失業率	4.1 (4.3)	4.1 (4.3)	4.1 (4.2)	4.2 (4.2)
コアPCE上昇率	3.4 (3.3)	2.5 (2.5)	2.2 (2.1)	

(2026年9月FOMCの資料より西村証券作成)

グラフ1

